

公開講演会

第78回公開講演会「薬師寺は移築したか」

1996年6月1日

平城京の薬師寺が藤原京の本薬師寺を移築したものか否かという問題は長い間の論争が続いており、未だに決着をみていない。近年、奈文研では、両寺の発掘調査を継続しており、いくつかの知見を得ている。そこで、これまでの論争を整理して問題点をあきらかにし、発掘の成果からどこまで問題解決がはかれるかを論じた。

◆寺崎保広：薬師寺移築論争と平城京の

薬師寺の発掘調査

研究史のうち、美術史・建築史・考古学の各分野の最近の論考を検討した。とくに一部の移建・新造説が近年注目をあつめているが、それに対して疑問を呈した。平城薬師寺の発掘では、とくに講堂の成果をもとにして、伽藍が建築途中で設計変更をすることとなり、そのため回廊が単廊として完成する前に複廊に変更された、とするこれまでの成果の見直しを主張した。結論としては、平城薬師寺は、本薬師寺を移築したものではなく、新たに造営されたとする説に妥当性があることを述べた。

◆花谷 浩：掘った！出た！わかった？

本薬師寺の発掘調査

本薬師寺の最近の発掘調査成果から、1)本薬師寺の中門は三間門で回廊は単廊だった、2)本薬師寺創建軒瓦は平城薬師寺のそれと違う、3)本薬師寺の建設は藤原京条坊設置より遅れる、ことなどを指摘した。中門・回廊の構造が平城薬師寺と違うので移建は不可能。出土した瓦も7世紀後半の創建瓦が大半を占め、これも移建を否定する。同様の状況は東塔の瓦にもあてはまる。東塔も移建されなかった。本薬師寺創建軒瓦が判明したことにより、平城薬師寺では軒丸瓦は本薬師寺用を流用、軒平瓦は紋様を似せて新たに作成したと考えた。二つの薬師寺間の瓦の供給関係は複雑で、同窓瓦の出土を単純に移建と結びつけるのは危険。本薬師寺の造営がいつ開始されたか、これまでには平城薬師寺東塔標銘の解釈によって天武朝と持統朝との二説があった。本薬師寺金堂創建軒瓦の紋様は藤原京軒瓦との関係からは天武朝とみたほうがよい。となると、藤原京条坊の設置時期が天武朝の古い

段階にまで遡ることとなる。本薬師寺の発掘調査は薬師寺論争だけでなく古代都城制の問題とも深く関わる。

第79回公開講演会「原始・古代の実年代にせまる」

1996年11月4日

奈文研では、かねてより年輪年代法による考古遺物・木造建造物等の年代測定をおこなってきているが、1996年4月に大阪府池上・曾根遺跡出土の弥生時代中期後半とみてよい柱根が52年B.C.に伐採されたものであることが判明し、弥生時代から古墳時代へかけて、実年代をどうあてはめるかが世間の話題となった。そこで、「原始・古代の実年代にせまる」というテーマを設けて、光谷拓実が「年輪で歴史をよむ」、工楽善通が「考古資料から年代をよむ」という演題で講演をした。

◆光谷拓実：年輪で歴史をよむ

出土した木材や古木の年代を測ることによって、遠い過去の実年代を知り得るのか、という年輪年代法の原理をやさしく解説するとともに、暦年標準パターンの作成手順などを述べた。その研究成果から、1996年11月現在、スギ材は1313年B.C.まで、ヒノキ材は912年B.C.まで測定が可能になった。そして、コウヤマキ材も、まもなく紀元前1千年代に達するだろうことを解説した。また、年輪年代法は、過去の年代を知るだけでなく、製作年代のちがう贋物をみぬいたり、古材の産地を同定しうる場合もあることを説明した。以上について、多くのスライドを映写してその実例を紹介した。

◆工楽善通：考古資料から年代をよむ

相対的な古さしかわからない発掘資料に、実年代に近い値を与えるにはどのような方法があるのか。とくに弥生～古墳時代の遺物に対して、年代のわかる大陸からの搬入品、および土器の様式編年からの年代の割り出しを解説した。池上・曾根遺跡以外にも、年輪年代法で弥生時代の実年代が古くなりそうな出土材があるが、いまのところはまだ、考古資料の交差年代をもつとめたうえで年輪年代を応用すべきことと、良好な年輪年代の測定値をさらに多く入手する必要を述べた。コウヤマキ棺材での紀元前後頃の実年代が確定すれば、弥生～古墳時代の実像を描くのに大きく寄与するだろう。年輪から東北鳥海山の噴火年代が466年B.C.であると判明したのは、東日本の縄文晩期の年代を考えるうえで重要な定点となる。